

## 新年を迎えて

年頭にあたり、謹んで新年のご挨拶を申し上げます。  
はじめに、この度の令和6年能登半島地震におきまして、甚大な被害が発生し、多くの方々が亡くなられたことに対し、謹んでお悔やみ申し上げますとともに、避難生活を余儀なくされている方々をはじめ、被災されたすべての方々に、心からお見舞い申し上げます。

新型コロナウイルス感染症が5類に移行したことにより、学校でも、縮小されていた教育活動が再開されました。この間、皆様のご協力の下、「学びを止めない」ことに重点を置きながら、工夫を凝らして学校教育活動を進められたことについて、改めて心より感謝申し上げます。

これからの変化の激しい予測困難な時代を生きていく子どもたちには、その変化を前向きに受け止め、主体的に行動し、よりよい社会と幸福な人生を創り出せる人となってもらいたいと考えております。

昨春、小・中学校において、1人1台端末を活用した「京都府学力・学習状況調査」学びのパスポート」を本格実施いたしました。子どもたち一人一人の指導に生かせるよう、学力の伸びと、学びに対する積極性など非認知能力の関係の分析を進めているところです。

この調査で得られたデータの活用や、これまで積み上げられてきた教員の経験、学校での取組に加え、教員それぞれのレベルに合わせて学べるICT研修等による指導力向上に取り組むことにより、個別最適な学びと協働的な学びを一層推進し、子どもたち一人一人に寄り添った教育を進めてまいります。

このような府内全体で進める取組だけではなく、市町村が抱える様々な課題に対応するため、各市町（組合）教育委員会が行つ、地域の実情に応じたきめ細かな取組を支援する「子どもの教育のための総合交付金」を創設いたしました。効果の高い取組が府内に浸透しながら進化するという好循環を生みだし、今後、京都府の教育環境をさらに充実してまいります。

時代の変化の中で、府立学校に求められる役割も変わってきております。

そのため、「府立高校の在り方ビジョン」に基づいて、高校改革に関する基本的な方針を示す「魅力ある府立高校づくり推進基本計画」を昨年12月に策定いたしました。今後は、地域別の実施計画を段階的に策定・公表し、少子化の時代にあっても、すべての生徒が夢や希望を持ち、未来に向かっていきいきと学ぶことができる高校づくりを進めてまいります。

また、特別支援学校につきましては、特別支援教育の在り方を学校現場と議論しながら様々な改革を進めてきており、昨年、仮校舎への移転を行った向日が丘支援学校では、教育と福祉の連携による共生社会の実現をめざし改革を行っているところです。これまでの改革を受け、次なるステップとして、障害のある子どもとない子どもが共に学ぶインクルーシブ教育も含めた今後の京都府の特別支援教育の在り方についても、新たに検討してまいりたいと考えております。

一方で、いじめ対策や不登校児童生徒への支援については、一人一人の子どもたちをしっかり寄り添うことが重要であるため、スクールカウンセラー等の専門人材や市町（組合）教育委員会の教育支援センター等とも連携をさらに進めるとともに、働き方改革により教員が子どもたちと向き合える時間を確保するなど、誰一人取り残さない教育の実現に向けて取り組んでまいります。

昨年、文化庁の京都移転が実現し、文化財行政の在り方も転換期を迎えています。京都府におきましても、リニューアルを進める丹後郷土資料館では、地域の歴史文化を学ぶだけでなく、エリア全体の観光や交流に繋げるハブ機能を発揮できるミュージアムを目指しているところです。これからは、従来の保存だけでなく、恭仁宮の活用整備をはじめ、地域の活性化と京都の歴史文化の魅力発信に繋がる活用の在り方を検討しながら、文化財行政に取り組んでまいります。

また、スポーツをするだけでなく、みる・ささえるという視点を取り入れ、スポーツを通じて夢が広がり、能力を生かして活躍できる社会の実現を目指す「京都府スポーツ推進計画」の改定にも取り組んでおり、子どもたちが、生涯を通じて文化やスポーツに親しむ機会の創出を図ってまいりたいと考えております。

すべての人が、子どもたちをあたたく見守り、小さな変化に気づいて支えることが、「包み込まれているという感覚」や「自己肯定感」に繋がります。

学校だけでなく、家庭・地域・社会との繋がりの中で、すべての子どもたちが幸せや生きがいを感じ、持続可能な社会の担い手となれるよう、皆様と手を携えながら、新しい京都府の教育の実現に全力を尽くしてまいります。

結びにあたり、今年一年の皆様のご健勝とご多幸をお祈り申し上げます。

令和六年一月